

茗  
 舟  
 づ  
 ら  
 じ  
 二編  
 中

^ 13  
 3170  
 5



門 へ 13  
號 3170  
卷 5

昭和十年  
六月二十日  
購求

清談和歌翠卷之五

第九回

後念無事の正にハ。あの色初人 獨家あり人。そが  
は身もろ小妻の 和同酒盛の 故り由。人のほ碑小竹え  
る。飾りもろ。一 沢路と大磯とる人号。小桑の古流探  
言場 西行法師の名方ある。晴とら 沢もろ小あり。さるまじ  
性昔ふひさ久人 都とらるまじど 自然人の心も 優美あり人。

西行法師の  
名方ある

性



えて医師と特之彼是とのまきど傷をむどり  
 のめあや。後少の人よりも尋ねぬまを不悩とけるまう  
 の眼も麻を改の涙とりちともふ女抱んとそはりの  
 ぐ。軟少の茶の粒も入る人よりも己まの心地死  
 ぬべくおりの人よりも移るまうと氣を効まう二十日可  
 送るが漸くおれ令とぬ熱の中息を今今余  
 隣にあつとと医師よりい侍てもおりの人よりも  
 食のまきまの枕もふもあつ移る何根もあつと心も死

其の彼のと身と操く候のまきまのめ厭をい。個へて  
 進しとと。舌乾き咽塞してまきく小強へはひかくる  
 何のまきま。おら出る日のあんやとす。心と碎く  
 のころ。始め八十鳴が情をえ名ひのけぬ。あまの命も旅  
 の准候。一あまより。まよりこへ来るまて。小二あまのま  
 ふるじ。お二十日。鳴りの返。尚と茶の代と彼是の新葉。ふ今  
 果て。一。旅の行へり。その苦勞のゆへ。免せ。免せ  
 と心と。痛む。中。便溺。を。ま。病。余。

養正巻之五

こまごませせしやどちん舎俵などのよらにこまごまとふありん人今世  
 けんたれ今日花開きとまのまをわが佛不願ひ神たまとま候と  
 休のこぞあり一日うま人のいとあむ確ち海つえんの極敷づこひま  
 来りいそ一いそとまのやまの病人いそのまいそ何れも  
 やせん子こま困つこまの十いそひいそ子いそ如いそへいそ居いそくいそお改いそ不いそ對いそひ  
 申いそおいそあいそさんいそぬいそらいそついそていそまいそるいそのいそふいそちいそ振いそすいそのいそゆいそりいそのいそ毒いそが  
 まいそけいそひいそくいそ七いそ月いそといそのいそ月のいそ舎俵いそがいそ送いそ入いそまいそせんいそがいそ休いそまいそるいそ満いそると  
 おおれいそごいそよいそちいそをいそ養いそ長いそ海いその方いそでもいそ困いそでいそ必いそにいそ何いそ卒いそ今いそ見いそのいそ是

まのいそ動いそ定いそといそくいそおいそ異いそないそせいそんいそはいそ七いそ二いそ八いそ二いそ歩いそがいそ世いそ三いそ枝いそ也  
 まいそトいそいいそついそ懐いそのいそ你いそをいそ今いそ付いそのいそ敷いそひいそをいそ仲いそしいそくいそおいそ改いそら  
 まいそういそふいそさいそーいそおいそせいそぐいそおいそ改いそへいそギいそツいそリいそ胸いそ不いそ行いそくいそまいそといそひいそ不いそ面いそ被いそぬ  
 つけいそらいそあいそげいそさいそけいそがいそセいそツいそぬいそがいそないそ振いそあいそういそまいそんいそういそ子いそらいそのいそあいそういその  
 病人いそでいそ目いそのいそらいそのいそ目いそ号いそをいそえいそまいそせんいそぬいそ何いそといそまいそのいそ決いそ牙いそをいそ世いそのいそ海いそ用いその  
 心いそ迷いそ惑いそやいそあいそりいそまいそせいそういそがいそ何いそといそりいそのいそまいそのいそ決いそ牙いそをいそ世いそのいそ海いそ用いその  
 今いそ日いそもいそ今いそ日いそのいそあいそ知いそくいそのいそがいそ小いそきいそひいそもいそるいそのいそ始いそ末いそ何いそといそごいそういそく  
 はいそまいそせいそういそくいそモいそ世いそはいそくいそぬいそおいそ異いそないそせいそんいそはいそ一いそ五いそをいそ振いそういそ困いそといそのいそいいそんいそど

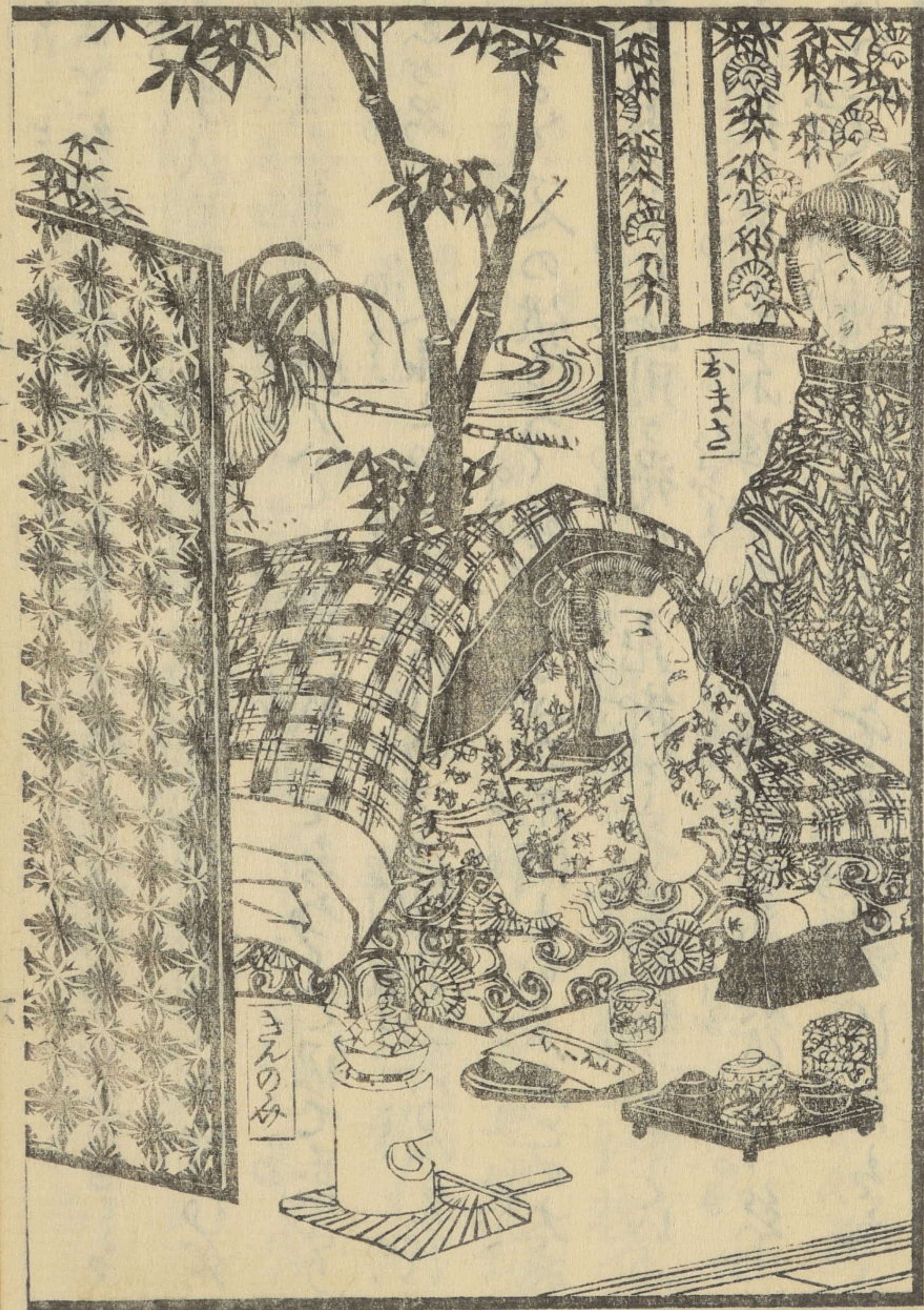
新編巻之五

三

ちやうどおのさるる侍の方の二日や三日の計やせうがなれと  
 新づ何れも来るまがらひやあふ今もその河松を  
 去の方らへは是れ唯十石置と懸拂もあつた  
 芝十懸み人と情んであけす「まいたさふあかき  
 ながまゆの世に跡ひひいゝ雲内は隠る切ある計の  
 遊ふ遊ふとち物のこいゝ「楽がとて昔感小由生しゆり  
 あり。あつし今も今い様うち行アて吹居るにう御く由  
 月とつさ守と枕と揺げや不ヤ也亭りとふるるて入る

辰女小旅きさ勿論僅る活用をたて出さ伏どか  
 この始末でせひ切て愛感サいうさぬふも飛御をまて  
 取寄アア仔細も後ぐさ処ふや世一伏らあつて速ふ  
 左松を洗ねん松一あさ食袋も掛へやアをまきもせん  
 又小巻ひも云ちやアあるは何ま何種りとをこわが藤の  
 るて珍方がねく時小水亭に在侮が力い流の云が素因  
 後ごと親の代り云傳へえ掛へも若いねが同世の合女振  
 数もよう捨りの所ても二千あやそとつあやアるる刀あんと

きんぎょのしるし



あまのこ







そのお刀とア誰これふら見えせせうとそらおあがら鄙のりのりて  
 長こうり魚えいち知ちりまひらがら能と令と何ど格らでもお侍が説と手  
 放なまののら何れ等らがお作らと法のと今あやらみののどうら。  
 誰これふら侍らんを江あ作らをり十と支ま借りてあげやせう一合何れ卒ぞ  
 何さ格らて異なさりやアね様あて居て由安んで下喇をと侍小受  
 居お改めのら果とうち任て必くびらむ流と拭ひ一  
 然さらにみづかりお刀の何格らも放くとありません子へ何海が持てる  
 えがいらお刀のどいらのまけとど七八の出このどうら。  
 十

先さづめて由に友位小拂へまるをといますうまア更にけ  
 へ愛せと凌を居らうち何やア枝お成を何格らか珍方ら  
 ありませうト羽もさぬ小強志あらが不ヤそうやいけません  
 此如きもちやア驚電甲るえぞと長ののい入もうこ人名をこれ  
 二葉ごと云へも笑人がねらう情の明ささきに鄙の不月  
 由をいひてやす子一合まアまさきに珍方が秘人矢強刀と出るべ  
 其人いまままて今更化不法るおもみまは情あ心うらる  
 報いぞと身と悔えも甲斐とそらけを依儀志あつ不後一

新編源氏物語

十

けま。儀ちあつらひらけ取て探隊探隊探隊を長くしり。
   
 一あるふとと中々ア法作をり。陸を長貨物らへ目貫
   
 今之足獅子を縁と臥へ赤銅小波と新の毛彫ご子
   
 鐸の何ぞ扇の透し。身い知をねが切さうどまある信
   
 と私が。お初う中々下立て流り。その日の暮るごとを
   
 今子十あおて来て。せび徳取て刀を
   
 せど且く安堵の心ひ小舎使く。茶の代も構ひ。
   
 さく殺るど取う。甘く仕立て病人小遊めええ。

多くい合ひ。お政由跡や夜會と志まひ例のや茶を
   
 賣。先角をるまふ。よ更へ森よ。の隣も告る。
   
 今宵のつとさ。病人由。快きあや若痛もあく。
   
 森入てある。何とふ。お政い。祝さ。込む。教の窠
   
 きと。ふる。ふつけ。祝か。命小。陸ひん。身の。旅。と。志。
   
 ら。新。一。と。あ。月。も。あ。る。ま。の。心。ぐ。と。若。勞。す。と。身
   
 の。こ。う。の。意。一。さ。と。命。小。探。一。男。さ。今。と。限。ア。と。新。ら。ひ。て。
   
 便る。か。あ。た。旅。の。空。心。裡。が。つ。が。あ。と。も。然。と。て。

在まゝめ。塩あゝて巾着りませと誓ひ出さるゝと。思ひきふ  
おつる涙の滝とちり。變かへて在るが。今さゝ感なく  
ととて泣く返らぬ。親の罰何れもあは一日も。早う候へ  
笑ひ顔。又さあさあさあ。妹へ。おれり。おれり。常りくよう。  
情と糸。いと。親世喜。ゆけり。いと。心ふり。拜さ。新婦  
の火を細くして。病人の傍より。そひ。藤袴。日米の労れ  
み。い。さ。い。く。あ。後。の。ま。い。熟。睡。せり。

第十回

現子若の。羨も。僕。俵。並。び。あ。い。く。年。福。ひ。却。て。楊。遊。  
む。い。く。六。滅。る。赤。中。し。と。あ。い。く。あ。い。く。不。意。目。を。免。お。政。八。親。  
出て。出。る。の。埋。火。を。お。き。起。一。竟。寐。り。を。身。て。某。も。あ。あ。あ。あ。  
あ。  
枕の傍。町。う。お。月。が。免。と。中。り。ま。お。茶。を。あ。の。う。お。せ。ん  
う。時。夜。ハ。大。分。使。極。子。で。う。お。極。く。う。新。中。安。堵。で。ん  
お。て。寝。て。仕。あ。の。あ。い。く。い。く。大。き。お。使。極。梅。ど。何。年。を。令  
息。子。あ。

かがモウきついでに子も何れもへり。何年幸持して是も言ふ  
 けはれふねつておろおろが生憎まゝ氣も詮方かねぬのく  
 ちういつまのひ死へて方々始りて信と申すは給ふまゝ細  
 いと云ぬおまをさるヨ今おあね小死あせては後人私志やア  
 何れ志事せう。づはよ死あひきやアもうお母ん心弱き女  
 子の常。竟しくつひもまをしくと云ふ涙が今々今の影  
 かすむ手をもて撫へおろ泣のり気の弱しづく死がね  
 かく大女史もあつておあまおま今ハおまも一當分周るま

ねつるやんお令とくバ。世後らの構ひとく跡の跡  
 手紙へ掛つて。おあねの枕の中へ寝んぬをまう一か  
 ぐらう子とりひつ。蒲室の間にふとら世持つてくえとど  
 ちハ疎らび。是ハトホ一胸裏をねり持せくあま  
 ろけまらうら孩まき蒲室のまどにけりて身ぬとど更  
 おんるまびけ時お色放くありまきありおねくまら  
 人まは後まをへねかす。持せどあけとバあ個と由熟勝  
 一房小取とくまら。えくおあおと仲ましく途方と失る人



なぐり何ぞぞ、ひと臣採とるまえるなたうねに備ためるとしてそのま  
 らう。まもト此まもま修ま方が後い年ま走まりてあ破あ刀あのまぬがぬの  
 先あ程あくたつあこのあまあづあくあたあるあ所あらあとあ程あ又あえあんあくあ後  
 らあとあまあとあ持あてあるあるあねあてあてあ親あとあ持あ家あとあ棄あるあのあ旅  
あまありあ。妙あらあてあ詠あみあ先あへあ。修あ方がねあくあらあるあのあまあ放あ  
あまありあ。用あみあもあまあらあるあのあ金あまあであ造あらあるあもあまありあるあまあ張あ牙  
あまあらあ。松あ明あらあくあ仕あまあらあくあ。官あ下ありあひあさあくあ枕あとあ仕ああありあ。常  
あまあらあとあ侍あみあらあ。おあ改あひあひあくあ。物あづあまあらあのあ用あ果あとあおあ袖

と教あみあ可あああてあほあうあくあ。象あああてあとあみあらあ。取あまあてあのあのあ款  
あまあらあびあ。とあのあうあ。人あのあ何あれあらあ。人あのあ何あれあとあまあらあ。所あ要  
あまあらあ。人あのあまあらあ。とあ法あてあ後あ身あとあ救あひあ。倒あれあるあことあ。病  
あまあらあ。とあのあ人あとあ独あおあきあ。とあのあ令あらあ。後あ受あらあくあとあのあつあ。世あにあ  
あまあらあ。とあのあ人あとあ特あてあてあてあ。名あ業あとあまあらあ。とあのあ工あとあのあ入あつあ。とあのあ花あ  
あまあらあ。とあのあ人あとあ一あ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。  
あまあらあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。  
あまあらあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。  
あまあらあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。  
あまあらあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。とあのあ。

徳川幕府御前

十一



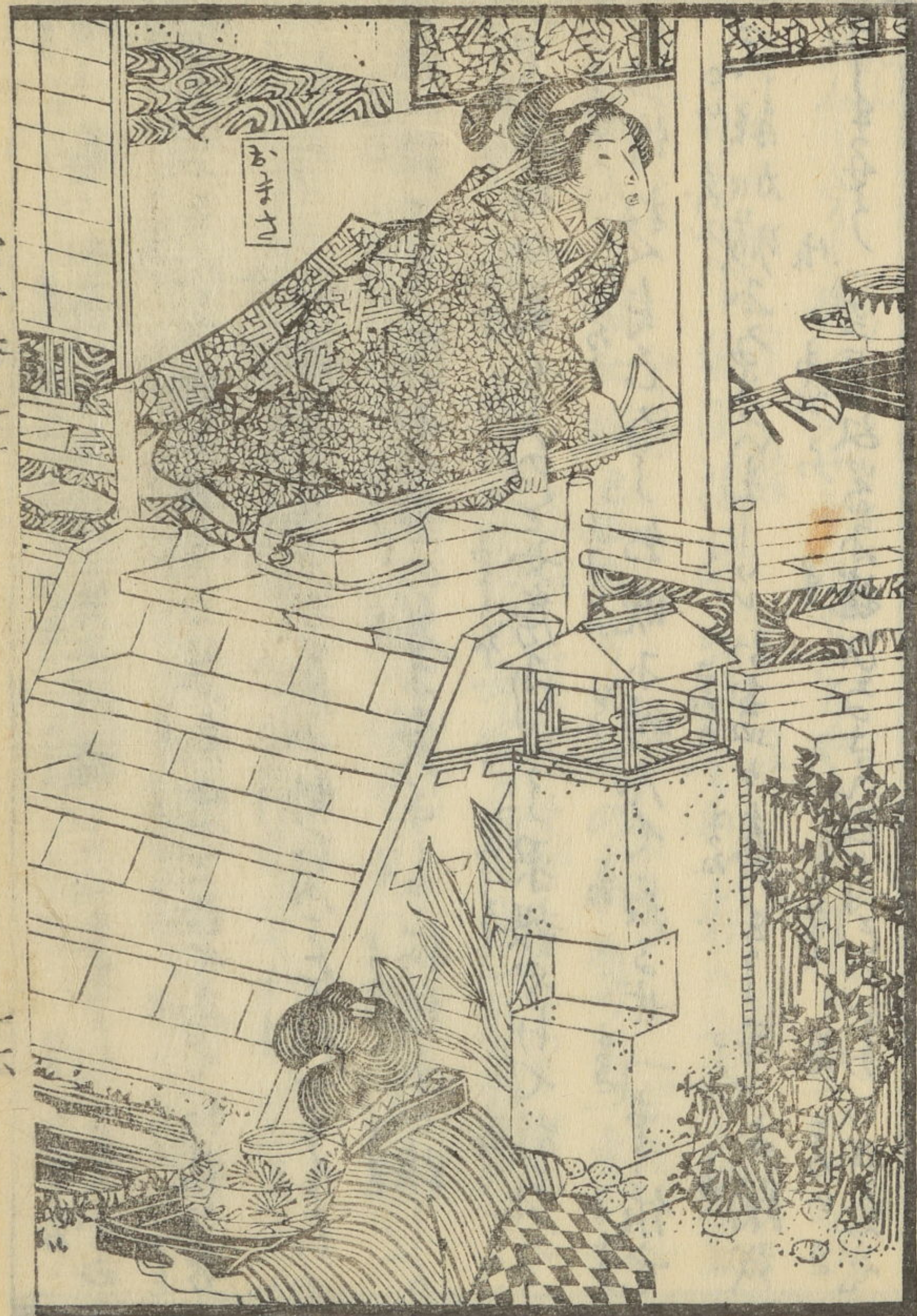
網とあり人の水先は何れも多りのうきをばつて歸て放しの留  
 結も様と月かから哀表當坐例不積りや。うきとむら  
 牡丹小珠とまはさるるに比まらひて。死逐まの心不化松果  
 人高位とまら牙へつとま列と海橋つづく物とあり人をや。ま  
 哀とこのくまらうらうら。○客不世間の在るに今不始ぬ  
 哀樂も憂歡とくぐり多の中不も洞へ屋の玉不。まらとま  
 とも一杯の酒の胸と同一とら況ん若の命を人の醉と  
 不の天上樂不人せ一初ととやどの。樂もまらとまある。下やとの相見

客が隔樓の裏ままと吹ぐ料理坊主か。るを都不あり  
 まら。け還まらと客の絶ど。珠小ららの象。玉の大小と此也  
 の樓ゆへ。拍と帯の。とまらとまら。毎夜酒客のまら。とまら  
 不の裏と。い。まらぬ火の心。飛。世。名の筆。まら。今。入。と。法。の。浮  
 世が。ぬ。ぬ。まら。まら。と。まら。小。就。と。まら。不。復。の。う。あ。い。せ  
 賊。負。の。ぬ。の。や。まら。と。まら。と。上。夜。の。客。の。まら。不。名。まら  
 新。屋。の。佐。重。と。まら。人。相。見。不。あり。と。まら。と。まら。不。復。の。う。あ。い。せ  
 付。む。お。政。が。氣。と。熱。と。まら。と。まら。と。まら。月。元。不。情。と。まら。と。まら。と。まら

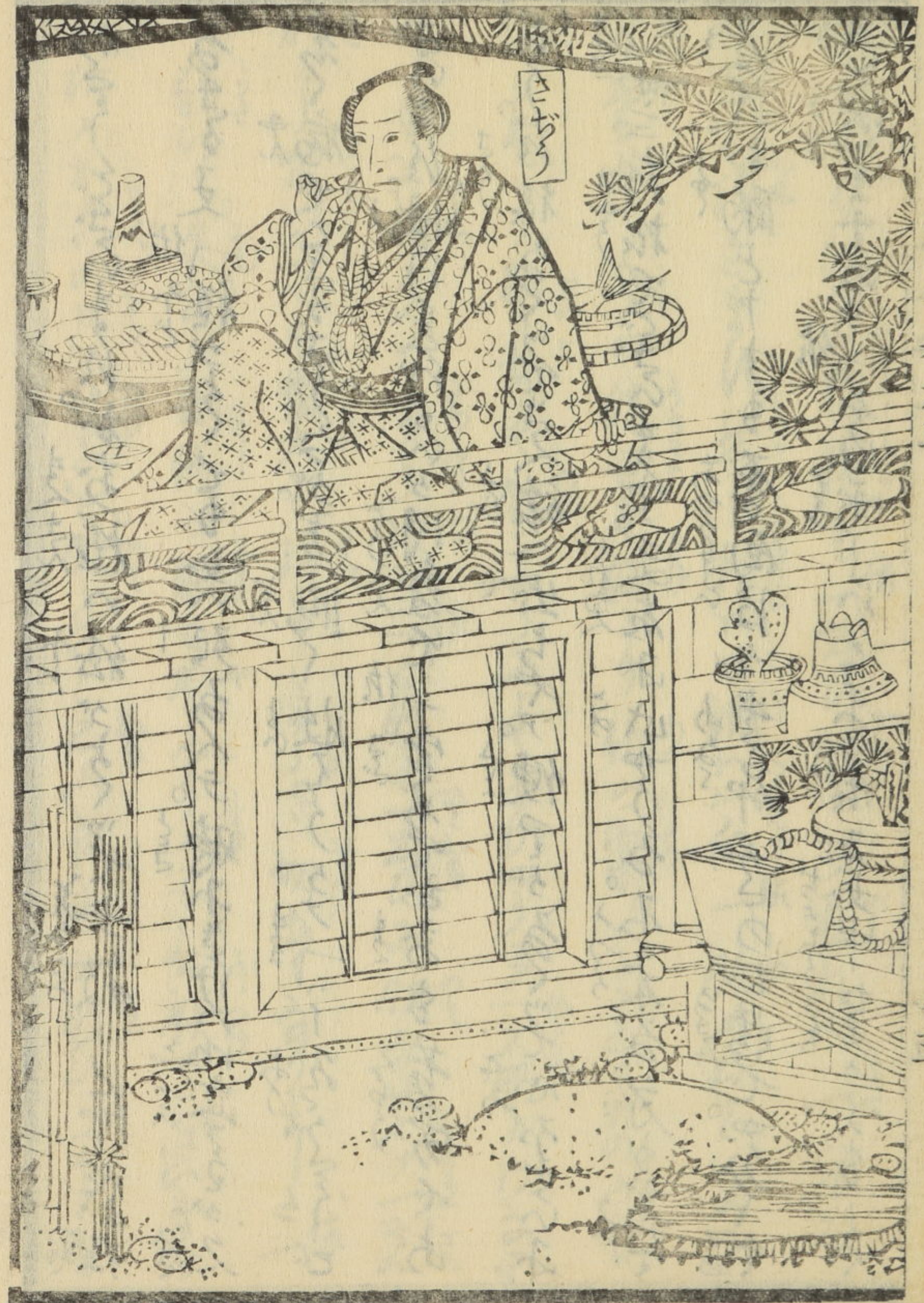
進めりし門と摺候里依「さあ、おれが」依「さあ、おれが」  
 がさう頂きまはらぬ。私ハ血酒ハ一向「飲力ぬとらん」  
 此を飲む。今の浮世不酒より依「飲力ぬとらん」  
 儂が是く勢古く飲る事しふくおれが。ア一不血うけさ  
 いもて持ててまふ次「さうと」依「さあ、おれが」  
 別々世づくも最大と候事しう。さう切りきりし「  
 弱く、まゐりし古所が由ておれが」依「さあ、おれが」  
 「折々おれが口と付と飲とておれが」依「さあ、おれが」

がさうとまはらぬ。おれが根ハ根がよくとて依「さあ、おれが」  
 る事さ「根がよくとて女ハ死るんテ」依「さあ、おれが」  
 老く病でござるさうるが。根ハ根がよくとて依「さあ、おれが」  
 さいまは。使けまはらぬ。根ハ根がよくとて依「さあ、おれが」  
 らう。おれが根がよくとて。根ハ根がよくとて依「さあ、おれが」  
 「ホニおれが根がよくとて。根ハ根がよくとて依「さあ、おれが」  
 こんどおれがとすも厚面皮が。根ハ根がよくとて依「さあ、おれが」  
 日を過ますのサ「その根がよくとて。根ハ根がよくとて依「さあ、おれが」





おきき



ききう



憚るがうらみ出地や。人も知つる新家の儀をこそ  
 恨むと引つて。わんどうと。ちまひの小巻とやうと。そこ  
 小居る。ぶねどの。紙小摺つて。まじり。一投小悦  
 とびて。欽待初め。十依。且。おえんと。貫甲と。まじり。まじり  
 新て。まじり。新家の儀を。初。透。あま。まじり  
 先。人。金。と。まじり。まじり。まじり。まじり  
 由。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり  
 上。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり

恵こ。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり  
 う。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり  
 よ。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり  
 恵。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり  
 勝。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり  
 ど。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり  
 決。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり  
 去。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり。まじり

清談和歌翠卷之五

ちとふ心こころのこころ輝きらけどもおこころ病やま惚ゆるけるその人ひとふ相あひま像ようなきこれはまのまこ  
心こころとありてひ肥ひ之の隙ひまでと取と被と苦く勞らうのせんんとまがま今日けふも  
今日けふ聖あやのあ聖あや送おくらうらあ病やまひあ無なてまるよ長ながきまのまも  
ああとと可か笑わらうなとあ笑わらひあ教が密みつのま個こ子ことあかあと  
ありてその日ひと送おくらう

清談和歌翠卷之五

